

介護相談員の声

「年を重ねても」

私は介護相談員として、特別養護老人ホームなどの介護保険施設等を月2回訪問しています。施設には、百歳を過ぎた方が何人かおられます。今日は、百五歳になれるSさんの話から紹介します。いつも髪をきれいに梳いて、後でまとめておられます。車いすに乗っておられますが、ご自分で食事も食べられます。ある日、お部屋におられることが多いので、「入ってもよろしいですか」と声かけをしますと、「どうぞ」と返事がありました。そして、「ここへ来る前は一人で暮らしていてお金のことは全部自分でしてたのに、今はどうなってるのかわからない」と心配顔をされました。「また事務所に聞いておきますね。施設の担当者との意見交換のときに、Sさんが、多分年金のことだと思いますが、心配されてましたので説明してあげてくださいね。安心されますように」と連絡しました。後日Sさんは納得されたようです。

介護相談員は、金銭や家族間の揉め事には深く立ち入らないことにしています。しかし、「施設内での食事がまずい」とか、「体調が悪いのでお医者さんに見てほしいが職員さんも忙しくしたはるし、よう言わんねん」などと言われたことに対しては、誰々さんが困っておられるので対処してあげてくださいと施設にお伝えします。まだまだ高齢者ほど遠慮されていることが多いと感じます。その思いを汲みとり、施設との橋渡しをするのが介護相談員の役割です。

Sさんより1歳年下のKさんのところには、家族の方が月2回程来て、算数のドリルを教えておられます。

Kさんは、体調のよい時は晴れやかな顔でおだやかに過ごされています。ある日、訪問した際には、英語で挨拶をされおしゃべりも弾みました。お部屋に招いていただくと、たぶん若い時にKさんが作られた立派なステンドガラスの作品が飾っており、墨でしっかりした字で書かれた格言の軸が壁につってありました。Kさんは得意顔で、難しい漢字の格言でも読まれるのです。

一人娘で、女学校を卒業してから結婚して満州に行かれたなど、お若い頃のお話はされましたが、ご主人との生活は話されません。花火師だったお父さんにかわいがられたのか、顔をくしゃくしゃにして、「なんでも私の言うことは聞いてくれはったんや」と何回も話されて、懐かしそうなお顔をされます。

Kさんご自身にも一人娘さんがおられたが、病気で先立たれたので、身寄りがなく、涙も流しきって入所されたのです。

百歳を過ぎても、車いす生活ながら自分のことを考えて、前向きな姿勢を保っておられるKさん。若い時はかわいがられて大事に育てられたが、今は孤独に耐えながら、置かれている環境に身をゆだねておられます。

命ある限りは、入所者を尊重しながら、大切に日を過ごすことができればよいと思います。

京都市介護相談員 塚田 幸子